

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：17701
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：20K00729
研究課題名（和文）看護・介護現場の接触場面における方言使用実態の調査と方言学習用アプリ教材の開発

研究課題名（英文）A Survey on Dialect Use in Contact Situations in Nursing and Nursing care and Development of a Mobile App for Dialect Learning.

研究代表者
和田 礼子（Wada, Reiko）

鹿児島大学・総合科学域総合教育学系・教授

研究者番号：10336349
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：看護・介護の場面では多様な方言の使用が予測されたことから、高齢者介護施設の協力を得て、介護スタッフの業務中の音声収集、介護施設利用者がよく使う熊本方言についての質問紙調査、外国人介護スタッフへの聞き取り調査を行った。録音データ、質問紙調査を文法、語彙、音声の面からの分析結果をふまえ、外国人看護・介護スタッフのための熊本方言聞き取り教材「聞いてみらんね 介護の熊本弁」を開発した。教材はiPhoneアプリ版と動画版があり、どちらも無料で公開している。また、外国人介護スタッフへの聞き取り調査から、彼らが施設内コミュニケーションをどのように捉え、どのような場面で難しさを感じるかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
介護・介護の現場で高齢者が多用する地域方言については、「難しい」という認識は共有されているものの、これを学ぶ教材は少ない。言語学習教材が少ない理由の一つに、方言教材は方言が話される地域ごとに作成する必要があるという点が挙げられる。本研究は外国人介護・看護スタッフのための方言教材を提供するとともに、作成のプロセスを報告し、今後、他地域で方言教材作成が行われる際の資料としての価値を含んでいる。

研究成果の概要（英文）：As it was expected that a variety of dialects would be used in nursing and care settings, we obtained cooperation from an elderly care facility to collect audio recordings of care staff at work. We also conducted a questionnaire survey on the Kumamoto dialect, which is often used by care facility users, and interviewed foreign care staff. Based on the analysis of the recording data and questionnaire survey in terms of grammar, vocabulary, and phonetics, we developed learning materials for foreign nurses and care staff to help them understand the Kumamoto dialect. The learning materials are titled "Let's Listen to It: Kumamoto Dialect in Care" and are available as both an iPhone app and a video version, both of which are free. The interviews with foreign care staff also revealed their perceptions of communication within the facility and the situations they find most challenging.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 外国人介護士 介護現場における方言使用 方言学習教材

1. 研究開始当初の背景

2008年以降、EPA (Economic Partnership Agreement、経済連携協定) に基づくインドネシア人・フィリピン人・ベトナム人看護師・介護福祉士候補者の受入れが行われており、2019年1月1日時点で677箇所の施設等で3,165人が雇用されている。これに加え在留資格「介護」の創設、技能実習の対象職種に「介護」が追加されるなど、看護・介護の分野で働く外国人のさらなる増加が見込まれていた。

EPAによるインドネシア人介護福祉士候補者が働く高齢者施設で、参与観察、インタビュー調査を行った上野(2012)は、専門用語に加え、高齢者施設で多用される地域方言理解の難しさを指摘している。中島・今村(2020)はEPA候補者の看護師90.4%、介護士75.9%が、方言がわからなくて困った経験を有していると報告している。

本研究開始当時、専門用語や介護現場で用いる語彙、申し送りで使用する表現など、看護・介護に対応した学習教材が見られるようになった。方言学習教材には『聞いてわかる介護の山形ことば』(後藤他2012)のほか、「方言身体語彙図」「医療福祉関係方言語彙集」(今村HP)のような特定地域の方言語彙集があるが、その数は少ない。

吉岡(2011)は社会言語学的立場から、医療従事者に対し医療コミュニケーションに関する調査を行っている。これによると、医療場面での方言使用は、患者の痛み・感覚や自覚症状などの医療情報を円滑に患者から引き出せるほか、患者との信頼関係の構築に役立つと捉えられており、医療ポライトネス・ストラテジー(親近方略)の一つであると位置付けられている。

看護・介護の場面では方言使用が肯定的にとらえられ、むしろ意図的に多用されている状況であるにもかかわらず、各地域方言の教材化は進んでいない。このような状況の中、看護・介護に従事する外国人にとって方言学習は不可欠であり、方言教材の開発は急務の課題であると考えられる。(和田他2022, 和田2024a, 吉里他2023)

2. 研究の目的

本研究は看護・介護場面における熊本方言の使用状況を調査・分析し、外国人看護・介護者を取り巻く言語環境の実態を明らかにするとともに、多用される方言を効率よく学ぶための学習教材を開発することを目的とする。

看護・介護の場面では多様な方言の使用が予測されるため、現場で実際に使われている熊本方言を録音し、データを収集・分析し、教材の設計につなげていく。

3. 研究の方法

外国人技能実習生を受け入れている介護老人保健施設の協力を得て、以下、三つの調査を実施した。

(1) 看護・介護の場面でのコミュニケーションに関する調査

介護施設で働く日本人スタッフ、外国人介護スタッフを対象とした調査で、方言使用状況、方言使用に関する意識や困難点の認識について尋ねた。

この調査は二段階に分けて行った。日本人介護スタッフにはまず、オンラインアンケート調査を行い、次にその結果を提示し、その要因について自由記述の形式で答えてもらった。調査の分析方法としては自由記述の回答データを用いたKH Coderの抽出語による共起ネットワーク分析を行った。

外国人介護スタッフにはアンケート調査(オンライン)の後、半構造化インタビュー(オンライン)を行った。インタビュー調査はアンケート調査の4か月後と、さらにその1年後に実施した。インタビューの内容は逐語録にまとめ、SCATを使用して質的分析を行った。

(2) 録音調査

介護現場における方言使用の実態を調べるために、録音調査を行った。日本人・外国介護スタッフが、業務に支障のない範囲で録音機器を身につけて介護業務を行い、その様子を録音した。調査当時は新型コロナウイルス感染症が蔓延している時期で、部外者が介護施設に立ち入ることができなかったため、協力者には録音時にどのような業務を行っていたか、記録シートへの記入も依頼した。録音データは熊本方言話者が文字化した。

(3) 方言用例の収集：記述式調査

方言用例収集を目的とした記述式調査を実施した。この調査では熊本出身の日本人介護福祉士、医療スタッフに、サービスを受ける高齢者が「よく使う方言」を書いてもらった。「食事場面」「痛み・症状」「日常生活」など具体的な場面を設定し、質問紙に答える形で記入してもらった。熊本方言はひらがなで書いてもらったが、「いいえ→んにゃ」のように、できるだけ実際の

発音に近い形で書くよう、指示した。

以上の調査結果の分析を踏まえ、看護・介護に従事する外国人スタッフのための熊本方言聞き取り教材を作成した。

4. 研究成果

本研究の成果は次の3点にまとめられる。

(1) 方言学習教材の作成

・方言学習教材「聞いてみらんね！介護の熊本弁」を作成した。これは、外国人看護師・介護スタッフが自学自習できる熊本方言の聞き取り教材である。具体的には「痛み・症状の訴え」「食事」「日常生活」という3つの場面で行われる介護士と利用者の会話を聞き取るもので、介護士の発話は共通語、利用者の発話は熊本方言で録音し、方言部分にはすべて共通語訳をつけた。利用者の熊本方言発話は介護施設で働く日本人職員を対象に実施した「利用者がよく使う熊本方言」に関する質問紙調査で収集した方言使用例を土台とした。収集された文の方言的特徴を語彙、文法、音声という観点から分析し、出現頻度の高い方言要素を含む会話文を作成した。また、実際の介護施設ではどのような口調で話しされているのかについては、録音資料を参考にした。

この教材はアプリ版と動画版がある。アプリ版の対応 OS は iOS である。動画版は YouTube で公開しており、本研究 HP からアクセスすることができる。

この教材の詳細については、2023 年日本語教育学会秋季大会で発表した（和田 2023）。



図1 アプリ教材



図2 動画教材

(2) 介護施設内コミュニケーションに関する研究

介護施設内コミュニケーションに関する研究としては、日本人スタッフを対象とした調査の分析と、外国人スタッフに行ったインタビューの分析を行い、それぞれ研究発表を行った。

・介護施設の日本人スタッフを対象とした調査の結果、専門用語、漢字、方言、日常会話の順に全ての項目において、外国人介護職員が困難を抱えていると認識する回答が有意に多いことが明らかとなった。また、自由記述回答で抽出した語との共起関係において、日常会話や利用者からの要求等の理解を阻害する要因が方言にあるという記述が多く見られること、外国人介護職員に質問される、理解に苦しんでいる場面に居合わせる等、直接的な体験をすることによって、日本人職員も外国人介護職員の困難な状況をより強く認識する傾向があることが明らかとなった（吉里他 2022）

・外国人介護スタッフを対象とした調査では、2度にわたり行った半構造化インタビューの内容を逐語録にまとめ、SCAT を使用して質的分析を行った。その結果 (1) 外国人介護士は介護施設内でのコミュニケーションについて、業務遂行・人間関係の構築・対人配慮という役割を意識していること、(2) 介護施設内コミュニケーションの困難要素として専門性・言語・対人配慮があるが、相手の話をよく聴いて理解・応答する場面は経験を重ねても難しいこと、(3) 経験を重ねるにつれ、介護士の技術向上に関わる業務場面でも、人間関係構築に関わる場面でも成長が見られることが分かった（國澤他 2024）。

(3) 介護施設で使用される熊本方言の分析

・教材作成に先立ち、介護施設で働く日本人職員 40 名を対象に「利用者がよく使う熊本方言」に関する質問紙調査を実施した。調査ではまず看護・介護に携わる外国人のための日本語学習教材『専門日本語入門 場面から学ぶ介護の日本語』の中から、「食事」「痛み・症状を訴える」「日常生活」の場面で、施設利用者の発話として例示されている文を抽出した。この文を日本人職員に「食事が済む→もう、クイオワッタバイ」のように、「施設利用者からよく聞く熊本方言」に変換して記述してもらった。

収集した文を「状況を説明する表現：名詞+が+状態変化動詞／形容詞」、「相手の行動を促す表現」「自分の行動について述べる表現」に分けて統計的手法を用いながら分析を行った。共通語においても、現実の言語コミュニケーションの場面で、同一事象を表す語や文法形式の組み合わせが多岐にわたることは想定されるが、社会活動の中で方言が頻繁に使用される地域においては、さらに方言特有の音変化や文法形式のバリエーションが重なり、共通語以上に多様な表現形式が出現することが今回の調査で確認された。

また、質問紙調査の回答を見ると、回答者によってその表記方法は様々であった。共通語ではこのような表記の揺れはほとんど見られないが、熊本方言では/ru/ は発音の仕方によって聞こえ方が異なるため、表記においてもこのような揺れが生じていると考えられる。熊本方言では、[r] 音を弾き音ではなく、そり舌音的な[r̥] で発音したり[r] の子音自体が脱落したり、促音化する場合もあるため、/gotaru/ という言葉に関し、[gotaru][gotar̥u][gotar̥] [gotat][gota?] の発音が存在していると考えられる。（和田他 2022、吉里他 2023）

・高齢者介護の現場でどのようなコミュニケーションが行われているのか録音し、外国人介護スタッフが高齢者の発話をどう理解し、対応しているか、分析した。高齢者介護施設では、多様な熊本方言が使用されており、外国人介護スタッフは、予想以上のレベルでこれに対応している。分析の結果、定型表現が多用される業務関連コミュニケーションではコミュニケーションが円滑に進んでいるが、生活世界コミュニケーションでは、外国人介護スタッフが高齢者の発話を聞き取れなかったり、勘違いしたりする場面もあった。これは会話の主導権が高齢者側にあり、想定していなかった質問をされたり、非言語的な手がかりのない状況で生じるトラブルで、自由度の高い会話では、日本語母語話者間でも発生することがある。（和田 2024b）

今回の調査で、方言多用地域の介護施設では多様な方言が出現し、外国人介護スタッフが業務を遂行するにあたり、ある程度、方言を理解する必要があることがわかった。

・熊本県内出身者 52 名に熊本方言「ゴタル」と後続音に関する調査を行い、これを分析した結果、後続音がどのような音であれ、「ゴタル」の「ル」は促音化、長音化、脱落化、巻き舌化するということが明らかとなった。また、後続音のない「ゴタル」は無変化で発話されるより「ゴタッ」と促音化して発話される可能性が高いこともわかった。（大庭 2024）

【引用文献】

上野美香 (2012) 「EPA によるインドネシア人介護福祉候補者の受入れ現場の現状と求められる日本語教育支援一候補者と日本語教師への支援を目指して」『国際教育研究誌』18(3), pp. 123-136

大庭理恵子 (2024) 「熊本方言における「ラ行音」の多様性」『ことばと文字』17, pp.150-160

國澤里美・和田礼子・吉里さち子 (2024) 「外国人介護士の介護施設内コミュニケーションの変容—SCAT での分析に見られる十全的参加への過程」『日本語教育』187, pp. 90-104

後藤典子・山上龍子／澤恩嬉 (2012) 「介護現場の山形地域語教材『聞いてわかる 介護の山形ことば』の開発」『日本語教育方法研究会誌』19(1), pp. 48-49

- 中島祥子・今村かほる（2020）「外国人医療・介護従事者と方言」『実践方言学講座 3』, pp.223-244
吉岡泰夫『コミュニケーションの社会学』大修館書店
- 吉里さち子・和田礼子・國澤里美（2022）「外国人介護職員の日本語理解についての評価とその要因—日本人介護職員へのアンケート調査の結果から」『2022 年度日本語教育学会春季大会予稿集』, pp. 64-69.
- 吉里さち子・和田礼子・大庭理恵子（2023）「方言多用地域における表現の多様性（2）：介護施設利用者が「日常生活」場面で使用する方言について」『鹿児島大学総合教育機構紀要』 6, pp. 61-76.
- 和田礼子・吉里さち子（2022）「方言多用地域における表現の多様性：介護施設利用者が食事場面で使用する方言について」『鹿児島大学総合教育機構紀要』 5, pp. 115-126.
- 和田礼子（2023）「外国人看護・介護スタッフのための方言学習用アプリ教材の開発」『2023 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, pp. 304-309.
- 和田礼子（2024a）「熊本方言と日本語教育—『日葡辞書』から外国人看護・介護スタッフのための熊本方言学習教材作成まで」『ことばと文字』 17, pp.122-128
- 和田礼子（2024b）「熊本方言が多用される介護施設における日本人・外国人介護スタッフと高齢者の会話分析」『ことばと文字』 17, pp. 161-170

【参照ウェブサイト】

今村かほる方言研究チーム 医療・看護・福祉と方言 HP
<<https://hougen-i.boo.jp/fp.php?code=develop>>（2024 年 6 月 3 日閲覧）
出入国管理庁 特定技能在留外国人数の公表
https://www.moj.go.jp/isa/policies/ssw/nyuukokukanri07_00215.html
（2024 年 6 月 12 日閲覧）

【本科研 HP】

熊本方言と日本語教育
<https://sites.google.com/view/sashiyori-kumamotoben/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 國澤里美 / 和田礼子 / 吉里さち子	4. 巻 187
2. 論文標題 外国人介護士の介護施設内コミュニケーションの変容 SCATでの分析に見られる十全的参加への過程	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 90-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田礼子	4. 巻 17
2. 論文標題 熊本方言と日本語教育 『日葡辞書』から外国人看護・介護スタッフのための 熊本方言学習教材作成まで	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 122-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馬場良二	4. 巻 17
2. 論文標題 『日葡辞書』の熊本方言	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 129-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉里さち子	4. 巻 17
2. 論文標題 熊本方言における文末表現の計量的分析 方言要素間の共起関係を含めて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 138 149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大庭理恵子	4. 巻 17
2. 論文標題 熊本方言における「ラ行音」の多様性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 150 160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田礼子	4. 巻 17
2. 論文標題 熊本方言が多用される介護施設における 日本人・外国人介護スタッフと高齢者の会話分析	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 161 170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉里 さち子, 大庭 理恵子, 和田 礼子	4. 巻 6
2. 論文標題 方言多用地域における表現の多様性(2) 介護施設利用者が「日常生活」場面で使用する方言について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 鹿児島大学総合教育機構紀要	6. 最初と最後の頁 61-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 和田礼子, 吉里さち子	4. 巻 5
2. 論文標題 方言多用地域における表現の多様性 介護施設利用者が食事場面で使用する方言について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鹿児島大学総合教育機構紀要	6. 最初と最後の頁 115 - 126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 和田礼子・吉里さち子・大庭理恵子
2. 発表標題 外国人看護・介護スタッフのための方言学習用アプリ教材の開発
3. 学会等名 2023年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 國澤里美・和田礼子・吉里さち子・嵐洋子
2. 発表標題 外国人介護士の語りにみられる介護施設内コミュニケーションの困難点
3. 学会等名 2022 年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉里さち子，和田礼子，國澤里美
2. 発表標題 外国人介護職員の日本語理解についての評価とその要因 日本人職員へのアンケート調査の結果から
3. 学会等名 2022 年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 後藤雅弥，塩盛舞，寺田縁，徳永志保，大庭理恵子，馬場良二，飯村伊智郎
2. 発表標題 地域語によるバーバルコミュニケーションを支援する聞き取り独習アプリとその評価
3. 学会等名 情報処理学会第83回全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	馬場 良二 (Baba Ryoji) (30218672)	熊本保健科学大学・保健科学部・研究員 (37409)	
研究分担者	飯村 伊智郎 (Iimura Ichiro) (50347697)	熊本県立大学・総合管理学部・教授 (27401)	
研究分担者	吉里 さち子 (Yoshisato Sachiko) (20544448)	熊本大学・大学教育統括管理運営機構附属グローバル教育カレッジ・特定事業教員 (17401)	
研究分担者	田川 恭識 (Tagawa Yukinori) (00645559)	神奈川大学・経営学部・非常勤講師 (32702)	
研究分担者	嵐 洋子 (Arashi Yoko) (90407065)	杏林大学・外国語学部・教授 (32610)	
研究分担者	國澤 里美 (Kunisawa Satomi) (10802613)	群馬県立女子大学・文学部・准教授 (22302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------